部活で防災、学ぶ中学生 東京・荒川の区立校、訓練や地域交流　自ら考える人材育成

2025/2/12付 | 日本経済新聞　夕刊

東京都荒川区の区立第五中学校で、アルファ米の調理訓練をする防災部の生徒たち（昨年12月）

東京都荒川区が、区立中学の全10校に「防災部」や「レスキュー部」という部活を設置している。訓練や地域との交流活動のほか、2011年の東日本大震災の被災地訪問などを通じ、防災の担い手育成を図る。

昨年12月の区立第五中学校。「防災ジュニアリーダー」とプリントされたジャンパーを着た18人の生徒が集まり、お湯を注ぐだけで食べられる「アルファ米」の調理訓練を行った。アルファ米は保存食品メーカー「尾西食品」（東京）が提供。一度に50食分がつくれる大きなサイズだ。

生徒たちは人形を使い、心臓マッサージや自動体外式除細動器（AED）の使い方も体験した。いずれも、顧問教諭の見守りはあったものの、説明者役は生徒が務めた。

荒川区教育委員会によると、きっかけは東日本大震災。避難所で活動した中学生がいたことを知った当時の区長が「自分たちの街は自分たちで守ろう」と考えるように。それを受け、区立南千住第二中が12年に「レスキュー部」を創設した。

15年には他校に防災部を設けて拡大。「先輩やきょうだいが入っている」という理由で入部する生徒が多いが、活動を通じて防災への意識が高まるという。ほかの部活との掛け持ちも認めている。

訓練のほかは、学校便りを地域の高齢者宅に配布して交流を深めるといった活動に加え、例年夏には東日本大震災で被災した岩手県釜石市を生徒たちの代表が訪問。現地中学生と交流したり、震災体験者から話を聞いたりしている。24年度は尾西食品や東京大大学院の開沼博准教授（社会学）が協力し、生徒たちへの防災意識調査も実施した。

南千住第二中レスキュー部の顧問、村上蒼教諭は「子どもならではのアイデアもあるので、あまり介入しないようにしている。生徒と一緒に考えながらやっている」と話す。

第五中3年で防災部に所属する川端俊生さん（15）は小学生の時に参加した地域の行事をきっかけに関心を持ち、民間資格の防災士も取得している。取材に対し「入学前から入部しようと思っていた。将来は防災に関わる仕事に就きたい」と語った。

開沼准教授は「義務教育の期間中に防災を学ぶ機会があることは意義深い」と評価。その上で「用意されたものを一方向的に学ぶのではなく、生徒が主体的に学ぶことは大事だ。全国に広がってもいいモデルだ」と説明した。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

NIKKEI Nikkei Inc. No reproduction without permission.